

エネルギー補充

みなさんは小学校の頃に校長室に入ったことありましたか。私は一度もなかったように思います。掃除やお尋ね等の用事も無く、問題行動も特になかった(記憶にゴザイマセン)ため、立ち入る機会がなかったのです。そういう縁の無かった校長室で過ごすことで、四月以来落ち着かない日々を過ごしています。ところが、最近にはわかたに校長室が賑やかになってきました。

毎日必ず来てくれるのは、クイズ少年です。彼は日々難問を投げかけては、私を悩ませます。私が答えられずひとしきり悩んでいるところで、かのクイズ少年はこの一言を言い放ちます。

「ギブアップですかあ？」

「むううう」とうなり声を上げながら、白旗を掲げる私。その瞬間、クイズ少年はほくそ笑むのです。

このクイズ少年とのやりとりは、最初から難問だったわけではなく、五問程度の歴史クイズから始まりました。そのクイズに私がごとごとく正解していたことが、クイズ少年のハートに火を付けてしまったのでした。クイズの内容は国旗の国名、首都の国名と変化しました。国旗や首都も私にとっては得意分野であったはずですが、昔の国旗だったり、アフリカの小国の首都だったり次第に難問は増えていき、私がかうなり、クイズ少年がほくそ笑む機会は増えていきました。そして先日、ついに超難問を抱えてクイズ少年はやってきました。

今回のクイズは、国土面積からの国名当てでした。

「第一問、三〇五二八平方キロメートルの国は？」

「いや、わかるかい！」

と突っ込む私に、クイズ少年は冷静に「少しヒントをあげます」と答えます。

「ヨーロッパの小さな国で、チョコがおいしいです」というヒントで、正解のベルギーが導き出されました。

「第二問、二〇七六〇〇平方キロメートルの国は？ これもヨーロッパですよ」

最初から地域を絞るヒントをくれました。ベルギー基準で正解がわかるかもしれないと思い、国名を次々繰り出しますが一向に正解しません。クイズ少年は、もうすでにほくそ笑んでいます。「予想どおりひっかかってる」と言わんばかりです。そうして、ついに私はクイズ少年に更なるヒントを請うことになるのです。

「今、ロシアと組んで戦争していますよ」(ニヤリ)

このヒントですぐにベラルーシ(超難問!)とわかったのですが、なんと的確かつ時事に即したヒントを出すのだろうと、ものすごく感心しました。感心したのもつかの間、その後も超難問の嵐に悩む私とほくそ笑むクイズ少年の図式は続いたのでした。今後も五年生のクイズ少年とのやりとりが楽しみです。

他にもイラストや工作の作品を披露しに来てくれるアーチスト少年や、時々ひよっこりと現れてお家のことやお友達のことを穏やかにお話ししてくれるお話少年、また、最近初めて来てくれたカモノハシが大好きなカモノハシ少女がいます。

さらに、昨日は三年生の集団が私の元へやってきました。三年生は続々と私の前に現れ、次から次へと質問を投げかけるのです。

「校長先生、妙泉寺公園の歴史を教えてください」

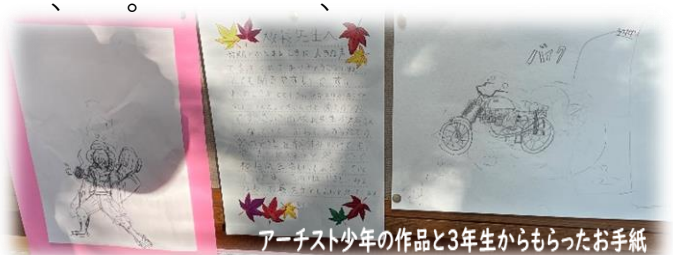
「校長先生、三ツ石駅の成り立ちを教えてください」

「校長先生、西南小の歴史を教えてください」

「いやいや、西南小の歴史はともかく、妙泉寺公園や三ツ石駅のことをなぜ私に聞くのかと、地元民は君らでしよと、タブレットで調べなさいよと、地元民は君らでしよと、タブレットで調べなさいよと、散々やり返しました。どうやら総合的な学習の時間の調べ学習で、調べ方は人に聞いてもいいとなっていたようです。聞きに来てくれるのは悪い気はしません、安易に人に聞くのは学習のやり方としてはよくないので、タブレットを持ってこさせて校長室で調べさせました。

その間です。わちゃわちゃとタブレットと格闘する三年生約十名とやりとりしつつ、クイズ少年ともやりとりし、そこに現れたカモノハシ少女ともやりとりしている状況、まさにカオス。

授業終了のチャイムと共に、彼らは去って行きました。カオスだった熱い校長室は、また寒い部屋に戻りました。子どもとの関わりは、エネルギーの消費ではなく補充なのだということに、いつも後から気づくのです。



アーティスト少年の作品と3年生からもらったお手紙